

屋形の実態

『薩州屋形之絵図』（前頁参照）は、1696年藩が幕府に提出した『元禄九年鹿児島城絵図控』を1756年幕府から派遣された京極兵部高主が写した図である。上半分は、山城を描き、頂上に丸囲みの本丸、二之丸の文字があり、大手口から新照院口に通じた道がある。

頂上の曲輪には初めて本丸二之丸が設けられている。この図は壮大な山城を描いたが、丸で囲んだ本丸、二之丸の文字だけで、そこに建物が現存したとは思えず、この時までに本丸、二之丸の建物は過去のものであった。

これに対し下半分は屋形を描いている。その中心の居宅は、1696年には20代綱貴がおり、1756年になると25代重豪がいた。このとおり、藩主の異動がはっきり記録されていた。更にその居宅を囲む堀と石垣(南側は外に折れ曲がりがある)、御楼門橋と御楼門の描写、そして侍屋敷であった区画が空き地に換えられた記述等々、藩政中期に屋形が盛んに利用され、大いに変化した様子も分かる。

藩政前期には、本丸、二之丸は山城の曲輪を指していたが、藩政中期には、屋形で居宅と言われてきた曲輪を本丸、二之丸と呼称するように変わって行き、重豪は屋形を充実させ御下屋敷に探勝園等を含めて二之丸と称した。